

## 伊勢物語

初冠<sup>うひかうぶり</sup>

昔、男、初冠<sup>1</sup>して、奈良の京、  
春日<sup>2</sup>の里に、しるよしして、狩<sup>3</sup>り  
に往<sup>4</sup>にけり。その里に、いとま  
めいたる女はらから住みけり。こ  
の男、かいま見てけり。思ほえず、  
ふるさとに、いと<sup>5</sup>はしたなくてあ  
りければ、心地惑<sup>6</sup>ひにけり。男の、  
着たりける狩衣<sup>6</sup>の裾を切りて、歌  
を書きてやる。その男、しのぶず



春日の里の「女はらから」(「伊勢物語絵巻」)

- 1 初冠 元服。貴族の男子が成人する儀式として初めて冠をつけること。
- 2 春日の里 春日山の山麓、現在の奈良県奈良市の奈良公園あたりにあった村里。
- 3 しるよしして 領地をもっていた縁で。
- 4 ふるさと 古都。奈良をさす。
- 5 いとはしたなくて まったく不似合いなさまで。

1 誰が、どのようなことを、「はしたなく」感じたのか。

6 狩衣 狩りに着用した衣服。のち、男性貴族の日常着となる。

7 しのぶずり よじれ(乱れ)模様を、草の汁で摺りつけて染めた布。

8 若紫 むらさき(草の名)の異名。

9 すり衣 草の汁を摺りつけて染めた衣。

りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫<sup>8</sup>のすり衣<sup>9</sup>しのぶの乱れ限り知られず

となむおひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。<sup>10</sup>

陸奥<sup>11</sup>のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。

昔人<sup>12</sup>は、かくいちはやきみやびをなむしける。

(第一段)

5

10 おひつきて すぐに。

11 陸奥の…… 「しのぶもぢずり」は、「しのぶずり」に同じ。「陸奥のしのぶもぢずり」までが「乱れ」の序詞<sup>じしご</sup>この歌は、『古今集』(恋四)に源融<sup>みなもとのとわ</sup>の歌として載るが、四句目は「乱れむと思ふ」。

12 いちはやき 激しい。情熱のこもった。みやび 風雅なこと。

\* なまめく \* はしたなし  
\* ついで \* おもしろし

## 読解

## 表現

1. 「春日野の」(二五・二)の歌で、「若紫」は何をたとえたものか、指摘しなさい。
2. 「いちはやきみやび」(二五・六)とは、「男」のどのような行為をたたえているか、考えなさい。
1. 次の(a)～(e)の傍線部の助動詞について、意味・接続のしかた・活用形を明らかにしなさい。
  - (a) かいま見てけり(二四・五)
  - (b) 心地惑ひにけり(同・七)
  - (c) 限り知られず(二五・二)
  - (d) おもしろきことともや思ひけむ(同・三)
  - (e) 乱れそめにしわれならなくに(同・四)

## 中納言参りたまひて

中納言<sup>1</sup>参りたまひて、御扇奉らせたまふに、「隆家<sup>たか</sup>こそいみじき骨は得てはべれ。それを張らせて参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、求めはべるなり。」と申したまふ。「いかやうにかある。」と問ひきこえさせたまへば、「すべていみじうはべり。』さらにまだ見ぬ骨のさまなり。』となむ人々申す。まことにかばかりのは見えざりつ。」と、言高<sup>こと</sup>くのたまへば、「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」と聞こゆれば、「これは隆家が言にしてむ。」とて、笑ひたまふ。

かやうのことこそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。

(第九八段)

1 中納言 藤原隆家のこと。道隆の子で、中宮定子や伊周の弟。  
1 「参りたまひて」の「参り」「たまひ」は、それぞれ誰への敬意を表しているか。

2 ななり 「なるなり」の撥音便「なんなり」の「ん」を表記しない形。

\* いみじ \* おぼろけなり

\* さらに (一打消)

\* かたはらいたし

### 読解

### 表現

1. 本文中の「」「」はそれぞれ誰の発言か、敬語法に注意しながら指摘しなさい。
2. 隆家が「これは隆家が言にしてむ。」(四〇・五)と言ったのはなぜか、考えなさい。

1. 本文中から「えく打消」「なくそ」の語法を抜き出して、現代語に訳しなさい。

## 二月つごもりごろに

二月つごもりごろに、風<sup>かぜ</sup>いたう吹きて、空<sup>そら</sup>いみじう黒きに、雪<sup>ゆき</sup>少しうち散りたるほど、黒戸<sup>くろど</sup>に主殿司<sup>しゅでんじ</sup>来て、「かうてさぶらふ。」と言へば、寄りたるに、「これ、公任<sup>こうにん</sup>の宰相殿<sup>さいしやうどの</sup>の。」とてあるを見れば、懐紙<sup>ふくじ</sup>に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに、今日のけしきに、いとうあひたる、これが本<sup>もと</sup>はいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。「誰々<sup>たれたれ</sup>か。」と問へば、「それぞれ。」と言ふ。みないとはづかしきなかに、宰相の御いらへを、いかでか事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前<sup>ごぜん</sup>に御覽<sup>ごらん</sup>せさせむとすれど、上<sup>うへ</sup>のおはしまして大殿籠<sup>だいだんろう</sup>もりたり。主殿司は「とくとく。」と言ふ。げに、遅うさへあらむは、いと取り所なければ、さはれとて、

空寒<sup>くわん</sup>み花にまがへて散る雪に

1 黒戸 清涼殿の北の廊。  
2 主殿司 主殿寮の役人。主殿寮は、宮中の清掃や灯火をつかさどる役所。  
3 公任の宰相殿 藤原公任、九六六一〇四一年。頼忠の子。平安時代中期の歌人。博学多才で、風流な人物としても知られていた。『和漢朗詠集』などの撰者。「宰相」は、参議の唐名。  
4 すこし春ある 「三時雲冷 多飛雪」二月山寒 少有春 (『白氏文集』十四、「南秦雪」) による。  
5 本 和歌の上の句。  
6 御前 中宮定子をさす。  
7 上 一条天皇をさす。

\* いたし \* さぶらふ \* げに  
\* はづかし